

ここで生きてきた
だから、
俺たちは生きる

1998年2月7日新宿駅西口地下広場ダンボール村焼失から
2月14日自主退去にいたる報告集

新宿ダンボール村通信特別号

1998年3月7日

編集・発行 新宿連絡会

定価 300円

「悔しいけど、青島に負けたんだよ。一生懸命にやってたあんたらでさえ青島に負けたんだよ！」

二月七日早朝、未だ消火作業が続く西口地下広場に立ちすくむ私の前に仲間がそう叫び、泣き崩れた。

かけがえのない四人の仲間の命を奪った火災、そしてその後の一週間の事態。それを記録に止めておくことを荷なわされた者は、洞窟の中、一人さまようが如くの寂しさの中、この任を果たさなければならない。思いおこせばおこすほど、混沌とした感情の高ぶりを押さえることがどうしても出来ない。

が、亡くなった仲間のためにも我々は書き、語り、泣きながらでも前に進まねばならない。これから生き続ける仲間のためにも……。

記 録 _____ 2

鎮魂の旅路

笠井 和明 _____ 3

新宿写真館

左2枚 小暮茂夫 右2枚 橋本弘道 _____ 9

二月八日ピラ（無念追悼） _____ 11

二月八日付声明文 _____ 12

二月十一日ピラ（もうここにはいられない） _____ 13

二月十二日ピラ（西口地下広場から） _____ 14

二月十三日ピラ（だから俺たちは生きる） _____ 15

二月十四日付声明文 _____ 16

二月十五日ピラ（ここに仲間がいる限り） _____ 17

記 録

1998年2月7日(土)

早朝5時、新宿駅西口地下広場インフォメーションセンター西側角から出火、高い炎と煙にダンボールハウスはたちまち包まれる。炎は西側、北側のダンボールハウス約50件を全焼、住民は着の身着のまま避難するのが精一杯であった。5時6分通行人から119番通報、消防隊の消化活動が終了したのが7時01分。焼け跡から3名の死体が運び出され、2名(内一名は全身火傷の意識不明状態)が救急車で東京女子医大、中野協立病院に搬送される。

以降、周辺一帯は立ち入り禁止のロープが張り巡らされ現場検証が始まる。

残ったダンボールハウスのほとんどが、滝のように流れる消化水によって水びだし。昼12時、衣類など被災者救援物資、昼食の放出。都・福祉局、建設局との協議、緊急措置としてなぎさ寮への入寮を合意、午後2時半から都庁前を受付に入寮開始、9名が入寮、引率。午後、東京都建設局の手により、火災現場に安全点検、補修工事用フェンスが張られ、インフォメ周辺は広場も含め全面的に封鎖。「左目」倉庫物資を搬出。フェンス前に祭壇が置かれる。

夜も被災者救援物資の放出。緊急会議、被災者救援を第一義とすることを確定。

2月8日(日)

前日に引き続き朝10時、都庁前でなぎさ寮入寮受付、23名入寮、引率。炊き出しを中央公園で実施。パトロール。「声明」発表。

2月9日(月)

朝9時新宿区役所前から、60名の被災者部隊で区長室に突入、被災者救援の緊急措置を要求し現場団交、分庁舎1階で被災者入寮受付48名入寮。午後福祉局との協議。

2月10日(火)

朝8時半区役所前情宣、被災者受付2階窓口でやらせ、18名入寮。

重体入院中の中村さんに面会、意識が一時戻る。

夜連絡会事務局拡大会議、自主退去方針を確定。

2月11日(水)

夜、パトロールによる呼びかけ、話し込みを開始。

2月12日(木)

なぎさ寮激励行動。

福祉局との協議。13、14日被災者対策80名枠でのなぎさ入寮を都区共同での街頭相談でおこなうことに合意。整理券配布。建設局と退去時の打合わせ。新宿福祉との協議、通常枠でなぎさ寮入寮中の仲間の期限延長措置を要請、実施させる。

夜、パトロール・整理券配布。

2月13日(金)

朝10時「街頭相談」開始、35名入寮。なぎさ寮激励行動。

連絡会物資撤収作業。

夜、パトロール・整理券配布。

2月14日(土)

朝10時「街頭相談」開始、39名入寮。撤収作業。

昼12時ダンボールハウス前で自主退去宣言、50名の部隊がデモで中央公園へ撤収。

3時40分占有解除立ち会い終了。

2月15日(日)

中央公園での炊き出し、200食。

夜、医療パトロール。

2月16日(月)

深夜2時40分、女子医大に入院中の中村和幸さん死亡。

鎮魂の旅路

98・2・7~2・14そしてこれから…

笠井 和明

相内一郎・裕子夫妻、下谷政義さん、中村和幸さん、

あの火災により、痛ましくも亡くなられた尊い仲間…。我々は慟哭の涙と共に限りなき哀悼の辞を述べる。ここで共に生きてきた仲間を俺らは決して忘れない。そしてここで死んでいったあの日を俺らは決して忘れない。

四名もの仲間をなくし、多くの仲間を傷つけていった明け方の火柱。

未だ闘病中の小川孝二さん、あの日の光景が眼にこびりつき、うなされ続けている多くの仲間達。被災された仲間達の一日もはやい回復を俺たちは祈る。

我々は鎮魂の旅をはじめなければならない。死んで行った仲間を無に帰すのではなく、生き残った一人ひとりの命の中にこれから生かし続けるためにも…。

亡くなられた仲間は、「ダンボール村」にいたからこそ今回の不幸な事故に巻き込まれた。

あたたかく、仲間のつながりがあり、仲間のいたわりの中で過ごせる、生き抜く活力を仲間の力で生み出す拠点の筈だった「ダンボール村」にいたからこそ、あのような悲劇がまちうけていた。

亡くなられた仲間は、孤独な野たれ死にはなかったものの、それと同様の、いやそれ以上の地獄の中、壮絶な仲間の叫び声と共に、その中で焼け死んで行った。

そんな、そんな考えられない程の辛い思いをさせ、仲間の命を失っていったものこそ、我々の「ダンボール村」だった。

亡くなられた仲間にとっての「ダンボール村」は、それを思えば、決して生きる希望の村ではなく、明らかに死への旅路を準備する絶望の村だった。

我々は「ダンボール村」にいくばくかの夢を託した。コミュニティという言葉と共

に、そこは自らが作り、自らが育てた町だと言い続けてきた。その言葉は現実の前にもろくも崩れ落ちた。

言い訳はいくらでも出来る。のうがきはいくらでも言える。意味付与もいくらでも出来る。が、二月七日、我々の目の前で起こった事実は、言葉の空しさをはるかに越えた現実の姿であった。

四人もの仲間を殺して行った呪われた「ダンボール村」という言葉を、この事実の重みを知るものは一生背負い続けていかなければならないだろう。

確かにそこには屋根があった。風避けもあった。プライバシーも少なからずあった。倉庫もあった。運動が拠点としてあった。そしてなによりも仲間の関係があった。コミュニティとしての野宿者の集住地として、新宿駅西口地下広場はおそらく他のどこよりも人間らしい関係が存在していた。

が、そこには決定的に安全がなかった。はかなくもそのことを今回の惨劇は証明した。村としての集合単位としてはあまりにも無防備な姿を「ダンボール村」はさらし続けて来た。悪く言うなれば烏合の衆的なそれである。ひとりぼっちはいやだから、人々は群れる。が、その「後」は？2年もの歳月を費やしながらも我々は群れ、集い、共同で住むことの、「後」には、一貫して無責任であり続けた。火災の恐怖と防衛本能は人々の間には確かにあった。我々も無頓着であり続けた訳では決してない。が、これだけの惨劇を目の当たりにすれば、その防衛心がいかに陳腐であったかを自覚せざるを得ない。あれだけの過密な状態で火の手があがればどれだけ被害が拡大するかを想像する力すら我々には欠けていた。現実の野宿の厳しさと人々の住への希求に規定され、振り回され、ダンボールハウスをただやたらに作り続けて来た我々には。

そして緊急避難所的な村なれば、まさしく、その「後」の問題、発展の経路こそ指し示さなければならなかったにもかかわらず、我々は現実の自然発生性にこそすべてを託し、何等の意識性すら発揮することなく、現実を現実として放置し続けてきた。過渡期としての「ダンボール村」は固定化され、社会から封じ込められ続け、そこに固執するしか我々には能がなかった。

翻って思い起こせば西口地下広場「ダンボール村」は、九六年一・二四強制排除事件で四号街路から排除された仲間達がインフォメ前緊急避難所を発展させる過程で形成されてきた「村」である。が、その発展の経路を指し示さず、不法占拠を武器とする運動方向を防衛以外指し示せず、仲間達の現実的な生活過程に運動が即反応する形で、増殖させ、固定化させて続けてきたものこそ、我々の「ダンボール村」であった。それが四号街路コミュニティ以上のものをそこに作りえず、仲間達の関係性を生かすことができずにいた我々の主体的な限界である。

自然発生性をつなぎとめ、それを根拠に運動を運動たらしめてきた我々は、その運

動によって悲劇を自ずから生み出して行った。その責は「ダンボール村」に固執してきた者一人ひとりが等しく負わなければならないだろう。人の死には偶然はない。その死の必然性を探り、見つけ、向き合うことに、人の死の意味がある。

我々は率直に言おう、新宿連絡会運動が四名もの尊い命を奪って行った。我々が彼・彼女らを殺してしまったのだと。その点について我々は何一つ言い訳などしない。

そして、だから我々は二・一四を決断した。

我々のはかなき、そして無責任で中途半端な夢は二・七早朝、確実に打ちのめされた。だからこそ、その後の一週間は死者の叫びと、被災した仲間の叫びを受け止め、向き合い、現実の新宿西口地下の中、現実可能なより現実的な判断を優先させた。

すなわち生き残った仲間がよりよく生きるということに。そして、新宿闘争四年間一度も発揮してこれなかった始めての大胆な意識性を発揮した。これが死者へのせめてもの償いであり、レクイエムだと信じ、自らの迷いを、焼けただれた二・七の光景にうちめさせ、自らを奮いたたせ…。

それを連絡会の路線転換だと言うのなら勝手に言えばよい。我々は陳腐な批判に耐えられるだけの思想的な営為をこの一週間の内に鍛え、そして主体的に我々の決断を選択したのだ。

一人でも多くの仲間の命を救うために。

この悲劇の打ちのめされ続けることよりも、この悲劇をバネに一人でも多くの仲間が少しでもよりよく生きられることを。

自主退去とは尻尾をまいて逃げることでも、政治的な妥協の産物でもない。野宿地を奴等に明け渡したとしても、そこに生きてきた、そして残された仲間が、これからこれまで以上のよりよく生きていける条件を作りだして行く「ダンボール村」からの発展の道筋であり、自主的に西口地下から移転した転進である。そして我々はそれを一糸乱れることなくやり切った。

「我々には未来を語り、未来に責任を持つことが必要だ。過渡期としての路上からの発展の経路を我々は我々の言葉で語り始めなければならないし、そのためのたたかいに立ちあがらなければならない。それは、行政や学者が語るのではなく、我々運動体こそが責任を持って語れることであろう。

越年・越冬闘争がスケジュール闘争としてこなし終わったなら、我々は同じこと

を繰り返さざるを得ない。本越冬以降のたたかいが消耗戦のたたかいとならないためにも、我々はこの地下の路上から天空に手を差し延べていきたい。

我々が出会った野宿者は決して団結して終わる野宿者ではない。』

第四回新宿越年越冬闘争支援連帯集会基調に我々はこう書き、そして今回の惨劇の渦中でそれを大胆に実践した。仲間の命は仲間を守る運動体である我々は、仲間の命はどんなことがあってでも守り、生きる運動体でなければならない。そこに、その一点にはどんな政治的な理念も無用だ。我々は運動のために運動はやらない。我々は仲間の命をただ守るために運動をやる。それが、そのみが新宿連絡会の仲間にとっての存在理由である。必要とあればメンツも捨てる。必要とあらばプライドも捨てる。必要とあれば悪魔とでも手を結ぶ。それが、我々の連絡会であり、我々の原則性である。

生きるための運動体が仲間に死を強制した事実を直視するなれば、我々には仲間の魂を昇華させ、残った仲間が転進するための決断が必要であった。二・七の運動的な総括点として二・一四が準備された。あまりにも急転直下の決断だっただけに説明不足な点は多々あっただろうが、西口地下広場に残った仲間は言葉ではなく、違ったもので我々の決断を理解してくれた。

我々の判断は決して間違っていない。我々を批判する者は、亡くなった仲間の顔も知らず、ここに共に生きてこず、そしてあの惨劇とその後の一週間を共にしなかった外部の者だけである。

あの決断は、二・七の焼け跡の前にいた者ならば誰しも感ずることを運動体が行ったまでの事であった。

二・一四が終止符なれば、我々はその地平から再び出発する。ここで生きてきたからこそ、我々は更によりよく生き抜くための歩みを踏み出す。過去四年の新宿闘争は二・一四に全て従属する。その成果も限界も含め。二・一四にもはや論議の余地はない。我々は二・一四を決断し、鎮魂の旅路を歩み始めた。この地平を認めない者は今後の新宿連絡会には無用である。

我々は仲間がよりよく生きるために行政支援を仰ぎ、利用する手段を取った。仲間

を野宿のまま固定し、居住拠点を移すだけの手段を取らなかった。何故ならその条件が昨年来のたたかいの中に明確にあったからである。

我々は、昨年十・一三、排除を前提としない都福祉局の自立支援事業を容認すると同時に寮内工作を開始し、その主体的なたたかいを支えると共に、十・一三入寮希望者団体交渉、一二・九、二・四と入寮者団体交渉を重ね、自立支援事業の改善と拡充を求めるたたかいを行ってきた。

「我々は収容プランだけを排除から引きはがし、それを利用者の利益にたって有効に使う道を選んだのである」（第四回越冬基調）

そして、一月二八日付け都・福祉局に対する「自立支援事業の事業内容に関し、更なる改善を求める申し入れ書」においては、

「付け加えるならこの事業の拡充について、上記就労問題を整理した上で、新宿においては百名規模の専用施設の整備が早急に求められていると思います。各々のプライバシーが守られ、ある程度の自主性が保障される非管理型（共同管理的な発想における）の施設ならば我々は大いに賛意を示します」と、自立支援事業の専用施設、すなわち自立支援センターの設置を容認する立場を表明している。

我々は我々を当事者団体として認め「対話」を前提に開始された都福祉局による自立支援事業を「ほんの一步」と評価し、寮内闘争と現場要求とを結合させながら事業改善を求めるたたかいを進め、我々の本来的な要求であった仮設住宅、軽作業労働保障を、まず、この事業の内部において発想化させ、より近い形で実現させていく闘争方針を採用した。この過程で都福祉局との論議を軸とした信頼関係は飛躍的に形成されていたのである。自立支援事業の容認という我々にとって初めての試行は、とりわけさくら寮などの仲間の主体的な立上がりによって規定され、その方向性は専用施設の設置へと向かっていった。すなわち、旧来我々が批判し続けてきた隔離収容型で排除の受け皿となる短期収容施設とは位相を異にする施設は、寮内の仲間が実態的に分断されないことを前提にすれば、我々にとっても、実現可能であり、しかも、現場要求的には野宿の仲間が野宿を脱し生きる手段獲得のための事業として必要不可欠な面をもつに至っていた。

我々は既に自立支援センター設置の要求まで出していた。ならば、今回の火災において被災者救援の要求の軸となるのは、当然ながらその施設の前倒し設置に他ならない。むろん、それが全ての要求ではないにせよ、現実可能な判断をするならば、二・七火災を受け、西口地下広場からの移転先は自立支援センターへ！しか考えられない。

旧来の短期宿泊援護などこの時点においては条件にすらない事は行政もまた認識していた（もしくは力関係において認識させていた）のである。そしてそのための協議に全力を賭し、結果として自立支援事業を前提としたなぎさ寮への無期限入寮、そして四月以降新宿区内二か所の自立支援センター暫定実施を、とりわけ新宿区を動かすことによって成功させ、なぎさ寮から区内の自立支援センターへという被災移転者の対策枠を獲得し、百七十二名の仲間が安心してなぎさ寮に移転した。もちろん、なぎさ寮内では生活改善要求などのたたかいが、すぐさま開始されている。

結果的に野宿地を奪われたと主張する者は、深夜西口地下を回ってみたまえ。そこにはダンボールハウスこそないが、かつてのように百名規模で移動層の仲間が仲間のつながりを頼りに野宿をしている姿に出会うだろう。ダンボールハウスは居住への権利の第一歩であるとかつて規定したことがあるが、ならば、ダンボールハウスを作ることを目的化するのではなく、ダンボールハウスからの発展の経路を権利として勝ち取ることにこそ、我々運動体は目指さなくてはならないのではないか。事実、自立支援事業で入寮した仲間はそのような権利意識をもち、行政支援を利用しながら安定した就労と居住を勝ち取り、更に後に続く仲間のためにと我々の様々な活動に参加してくれている。そのような現実的な希望がある限り、ダンボールハウスは奪われたのではなく、解消しただけの話であり、我々は運動体の責務としてダンボールハウスに住んでいた仲間の権利を仲間と共に勝ち取って行ったのである。

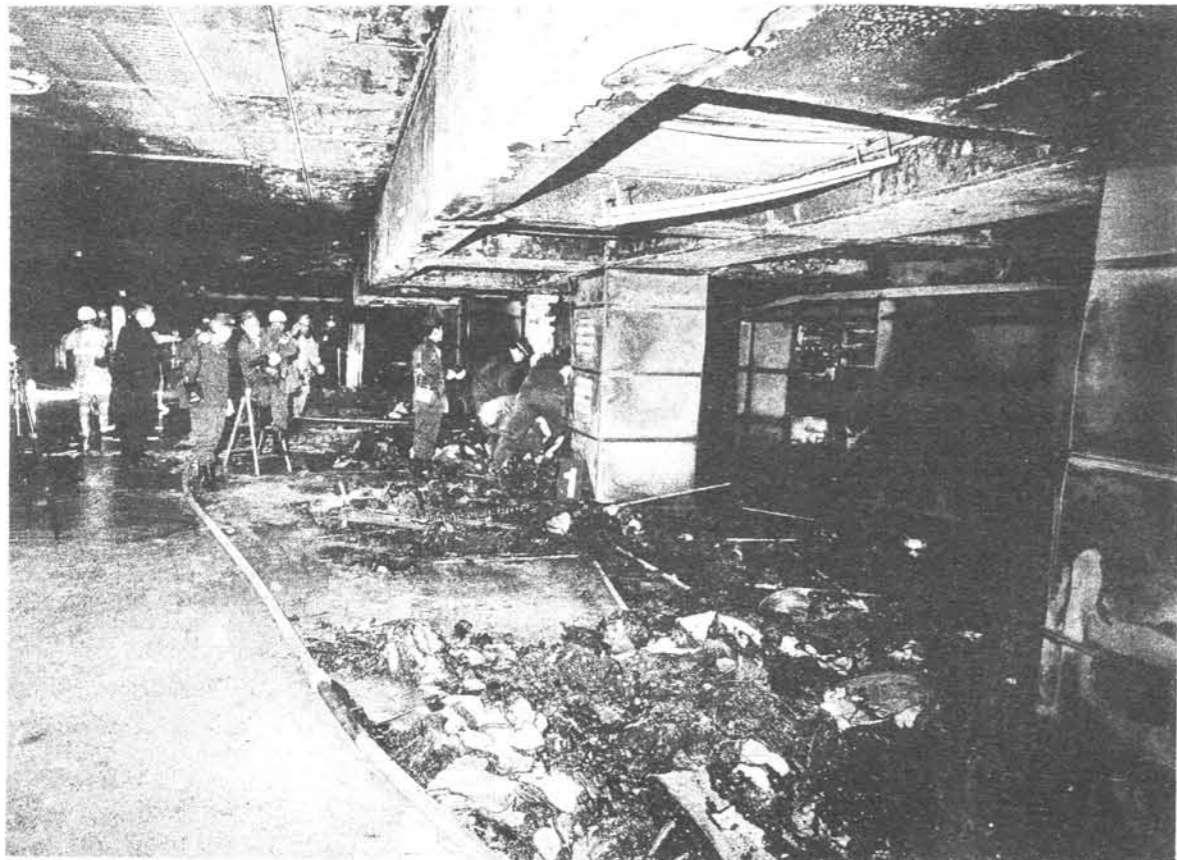
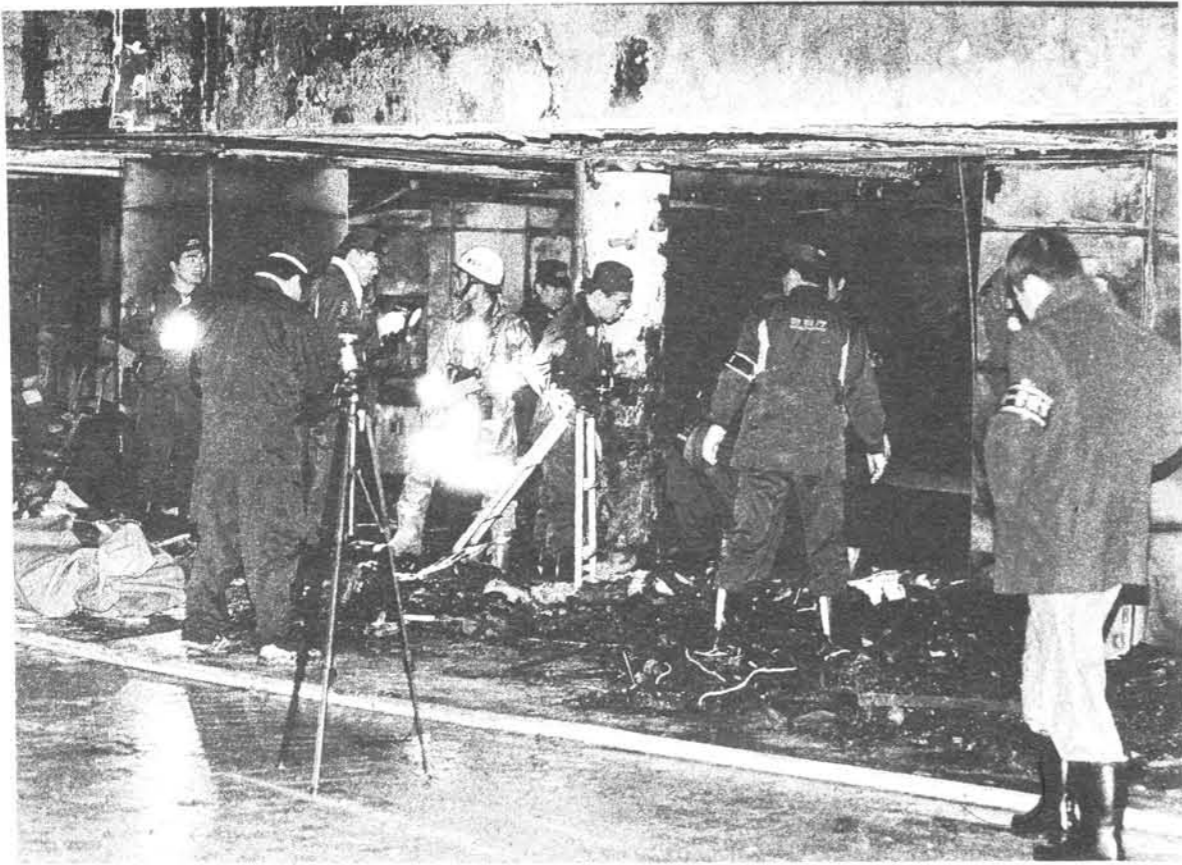
無論、自立支援センターが全てであるとは我々は思っていない。が、生活保護法との整合性を保障する事業としての可能性はこの中には十分孕まれていると考えている。否、行政にまかせるのではなく、主体的にそのような事業へと改善していかなければならないだけの話である。一方で施設入所を拒み、野宿での移転という選択をなした仲間の存在を無視することは当然出来ない。野宿のまま自力で生き抜いて行こうとする仲間の能動性は我々は従前通り認め続け、学び続けなければならないし、その発展の経路もまた具体的に作りださなければならない。

「ダンボール村」に閉塞していた我々は、新宿駅地下、地上、中央公園、戸山公園などで撤去に抗し生き抜いている仲間と、再び新たに出会う契機を自ら作り出して行った。

新宿の仲間とのつながりは、場所は違えど大きく広がった。四月から多くの仲間は新宿に戻ってくる。野宿をしてもしていなくても共にここで生きてきた仲間は仲間だ。あたたかくて、でっかい団結の希望が、俺たちにもようやく見えてきた。

亡くなった仲間にそれを笑顔で報告できる日まで…。

(了)



昨日の火事による仲間の死。インフォメ村インフォメ周辺消失

今はたいてい仲間の命を
生かすことだけ考えよう。

無念追悼

被災した仲間へ
なごさ寮に
お別れを
申し上げます。

仲間たち！

インフォメ周辺ダンボール村が消失した。

この不幸な事故の中、三名の仲間が焼死、2

名の仲間が重体で入院した。亡くなられた仲

間は相内一郎さん裕子さん夫妻、下谷政義と

思われる。何とも言い尽くせぬ事故で亡くな

った仲間には俺らは冥福を祈ることしか出来な

い。けれど亡くなった仲間と共にいたインフ

オメを俺らは決して忘れない。この慟哭の思

いを胸に刻み、やはり祈り続けよう。

無念追悼！

出火原因は未だ正式には分かっていない。

色々な憶測が飛び交っているが、これは今の

段階では何とも言えない。村が消失し、イン

フォメ前拠点が開鎖された現実。これを期に

新宿署などの追い出しが強化されることは避

け難い事態であることを考えるならば、原因

はさほど大きな問題ではなからう。

今週のスケジュール

- 9日(月)
被災者
なごさ寮入寮
福祉行動
朝9時区役所前集合
- 11日(水)
パトロール(馬場・新宿)
夕6時インフォメ前集合
- 13日(金)
さくら寮面会行動
午後2時半さくら寮前
- 14日(土)
新光館・春陽寮
面会行動
午前11時インフォメ前集合

被災した仲間へは緊急措置でのなごさ寮へ

の入寮を昨日、今日と実施している。明日も

多くの仲間がなごさ寮に入れるよう俺たちも

最大限努力する。明日は朝9時区役所前に集

まって福祉とかけあう予定だ。

新宿に残って頑張るという仲間は出来る限

りの毛布、衣類を放出している。もはやダン

ボールハウスを建てるどころではなく野宿場

所も限られてしまうが、仲間の力を合わせな

がらどうか、散らばらずに頑張っていこう。

バラバラにさせられてしまったら本当にも

うお終いだ。バラバラにされず、一刻も早く

野宿から脱せられる対策、移住できる場所を

一致団結しながら求めて行こう。新宿連絡会

はそのために全力を尽くす。西口地下に仲間

が例えいられなくなっても新宿の地に野宿の

仲間がいる限り新宿連絡会はたたかい続ける。

この危機を仲間の力で乗り越えよう。諦め

るにはまだ早い！

新宿連絡会

新宿野宿労働者の
生活・就労保障を求める
連絡会議

98年2月8日
第11期NO131

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け ☎03(3876)7073
現地・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村030(818)3450

現場の情勢により
予定変更もあります。
緊急行動・情報は
ピラでお知らせし
ます。

声明

1998年2月8日

昨日2月7日早朝5時すぎ、新宿駅西口地下広場のインフォメーションセンター周辺で火災が発生し、約670平方メートルにわたって延焼した。猛火はダンボールハウス40軒以上を全焼させたばかりでなく、ハウスの住人3名(男性2名、女性1名)の生命をも奪った。また他に2名が全身やけどなど、重傷を負い、救急で入院している。

新宿野宿労働者の当事者団体である我々は、3名の仲間の命を奪った今回の惨事を目のあたりにして、持つべき言葉を失っている。今はただ3名の仲間のご冥福を祈るだけである。

出火原因については様々な憶測が乱れ飛んでいるが正確なことはわからない。噂を根拠にした「警察情報」には政治的な意図すら感じられる。噂に基づいて出火原因を云々するよりも我々には行政や世間の人々に考えていただきたいことがある。

すなわちそれは、①なぜこれだけ多くの人々がダンボールハウスという劣悪な居住環境のもとで暮らさざるをえないのか? ②なぜ火災の延焼があんなに速いスピードで進んだのか? ダンボールハウスの狭い地域で過密にひしめく状況を作り出したのは誰なのか?、という二点である。

第一の問いに対しては様々な答えが考えられるが、ここでは過去最悪の完全失業率を記録し続ける近年の経済不況と、失業し、住みかを失った人々に対する行政の無策を指摘するにとどめる。第二の問いに対しては、ガードマンを使ったり、「動く歩道」やオプジーエやブランタンなどを設置して野宿できる場所を次々と奪い、居住地を築めていったのは誰か、ということを考えればすむだろう。我々はこうした現状が悲劇を引き起こしたという現実について声を大にして訴えたい。今回の悲劇は貴方たちの暮らすこの国で、1998年に起こった出来事なのである。

そして7日午後、インフォメーションセンターの周辺一帯、約2000平方メートルに及ぶ広大な地域が高さ2メートルのフェンスで封鎖された。目的は「復旧工事のため」というが、火災のあった南側や東側だけでなく、火事に関係のない北側や西側までもフェンスが張り巡らされたのである。このため火災の被害を全く受けなかったダンボールハウス約30軒が立ち入りできない状態になってしまい、普段、我々が炊き出しや越年期の仮シエルターなど様々な活動で使用していたインフォメーションセンター(北側)

の広場も全面封鎖されてしまった。この措置は野宿者を治安管理の対象としてしか見ない警察権力の主導で行なわれており、火災にかこつけた排除行為としか言いようがない。北側や西側の封鎖は「資材置き場」のためと言われているが、工事面積よりはるかに広い「資材置き場」を必要とする工事とは、一体、何のための工事なのであろうか。

火災とそれに追い討ちをかけるフェンス設置によって、一帯のダンボールハウスの数は半減してしまい、野宿できる場所はさらに限られることになってしまった。フェンスの全面設置により西口地下広場を通行する人も不便を強いられることになったが、警察サイドの動きは通行人の不満が残されたダンボールハウスの住人に向かうことを意図しているかのようである。人の不幸につけこみ、混乱に乗ずる形で排除を行ない、卑劣な手段で問題の「最終決着」をつけようとする動きを我々は絶対に許しはしない。強権や暴力はさらに多くの仲間に無念の死を強要するだけであり、我々は警察や行政に対して一昨年の1・24強制排除の愚挙を繰り返さないよう強く警告する。

我々の目的は西口地下広場に居座ることではない。我々は一貫して仮設住居と軽作業労働の保障を行政に求めており、野宿の仲間が安心して暮らせる居住地と安心して就労できる仕事さえあれば、喜んで移住するであろう。昨年10月より始まった東京都による「自立支援事業」に対しても我々は都福祉局との話し合いを通して事業に協力し、事業のさらなる改善を求めてきた。今回、週末にもかかわらず都福祉局が中心となって、焼き出された人たちのために越冬施設「なぎさ寮」の緊急入寮の手続きを行なった(7日9人、8日23人が入寮)、こうした状況に即した施策の運用は、当事者との直接対話を通して初めて生まれてくるものであろう。我々は西口地下広場の今後、行政による「路上生活者対策」の今後に関して東京都の話し合いを通して問題を解決していきたいと考えている。

残された者にできることは亡くなった仲間の分まで生きていくことしかない。深い悲しみを胸に抱えながらも我々にできることは「生き抜くための条件をこの手につかむ」という我々の「闘い」を進めていくことしかない。是非、心ある多くの方々に、より一層の暖かいご支援とご協力をお願いしたい。

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求めめる連絡会議
(新宿連絡会)

撤去にはいい、対策を今都区にさせている。

キウ 仲間を一人ひとりに
 こにはいいから、選取をしてくれ!

火災で重体の中村君は
 ようやく意識が戻った
 被災、仲間を支援して

仲間たち！とりわけ西口地下広場で寝ている仲間たち！

7日の大火災以降、西口地下広場は極度の緊迫感につつまれている。新宿連絡会はこの緊急事態に対し、被災者救援を第一義に考え、行政に緊急対策なごさ察への無期限入寮をやらせる（既に98名の仲間が入寮）と共に、西口緊急対策としての自立支援センターを区内に早急に作れと声を大にして訴え続けている。そして都区は百名枠での入寮を今真剣かつ早急に具体化しつつある。入寮受付は近日中に発表される予定だ。

もはや西口地下広場に俺たちは安心して住みつつけることは出来ない。これはインフォメ周辺のみならず西口地下広場全域でだ。既に三建は警告書を張り、24時間体制で警察やガードマンが警備体制をひいている。インフォメの改修工事が始めれば騒音地獄で寝てもいられないだろう。

当面のスケジュール

- 12日(木)
 なごさ寮激励行動
 朝9時半区役所前集合・出発
 パトロール
 夜8時半、安田生命角、机出しの前集合
- 13日(金)
 なごさ寮激励行動
 朝9時半区役所前集合・出発
 パトロール
 夜8時半、安田生命角、机出しの前集合
- 15日(日)
 炊き出し配食
 午後7時
 中央公園にて
 救世軍がやっている場所

新宿連絡会は苦渋の選択を余儀なくされた。そして苦渋の決断を今選択せざるを得ない。

我々は西口地下広場から自主的に撤収する。そして、今いる仲間には自立支援センターに入るうと呼びかける。

仲間たち！センターに入るか、移動するか
 の選択をまずしてくれ。時間がない。今週中にもだ。移動する仲間への物資の提供などは連絡会が責任をもってやる。安田下に取りに来てくれ。センターに入る仲間は荷物をまとめて受付の情報をまわってくれ。それまで撤去されることは決してないし、我々が決してそれをさせない。

一時的にバラバラとなったとしても、仲間が集まれる場所さえあれば俺たちは必ずつながって行ける。新宿連絡会は健在だ。仲間の命を守るたたかいを必ずや仲間と共に発展させて行く。今はこらえてくれ仲間たち！

新宿連絡会

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求め
 連絡会議 98年2月11日 第11期 NO132

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け ☎03(3876)7073
 現地・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村030(818)3450

ビラの連日
 出します。

西口地下広場から

連絡会は14日に自主退去を決定

なぎさ寮-自立支援センターに移ろう!

希望者はあすあさまで朝9時 安田下町とホムハウス前に!

仲間たち!

東京都、新宿区は明日、あさつて、西口地下

下広場で街頭相談を行ない、なぎさ寮への緊急入寮を行なう予定だ。このなぎさ寮入寮は無期限、4月以降、新宿区内に出来る自立支援センターにつながっていくもので、入所対象者は西口地下広場に寝起きしている仲間だ。自立支援センターは衣食住は当然、そのみならず職安を通し仕事を探すことを支援してくれる施設だ。仕事が決まり、安定した収入が得られ、区立の宿泊所や都営住宅に移りすむまで、支援は続けられる。もちろん、緊急事態の中での対策なので最初は混乱するだろうが、なんとか辛抱すれば長期的には展望のある事業だ。入寮希望者は手荷物をまとめて明日午前9時インフォメ前ダンボール村の前に集まってくれ。

とが出来た。この事業を利用してこの難局を

我々は14日、「街頭相談」で最後の仲間が入寮する時点で西口地下広場から自主退去する。強制排除による結末ではなく、二百名近い仲間の命を救うこと最優先させた我々の決断は、決して悔いの残る決断ではないと思う。我々は一人でも多くの仲間が生き残れる道を選択した。これ以上の犠牲者を出さずとにかく生きることに、これが亡くなった3名の仲間に対するせめてもの供養でななかるうか。我々はこの難局を乗り越え、寮に入った仲間、新宿の各所に分散しながら残った仲間をむすびつけ、更なるたたかいを前進させる。我々は決して負けた訳ではない。命ある限りいくらでもたたかい続けられる。

どこに行っても俺たちには仲間がいる。別れは新たな出会いの始まりだ。この難局を乗り越え、新たなたたかいをスタートさせよう。

新宿連絡会

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める
連絡会議 98年2月12日 第11期 NO133

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館 付 03(3876)7073
現地・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村 030(818)3450

●15日(日)
炊き出し配食
午後7時
中央公園にて
救世軍がやっている場所

こゝで生きてきた。俺たちは生きる。

1998年

2/14 正午 西口地下広場から
撤収

仲間たち！

新宿連絡会は明日、2月14日（土）正午をもって新宿駅西口地下広場から自主退去する。

3名もの仲間を死なせた7日の火災以降、俺たちは全力で東京都、新宿区などとの協議を続けてきた。俺たちは、もうこれ以上の犠牲者を出したくない、あんな地獄絵をもう二度と仲間に見させたくはない、その思いの一点で、残った仲間のなぎさ寮への緊急避難的な入所、そして4月以降の自立支援センターへつながることも含め、ようやく都区内に確約させることが出来た。これで俺たちは安心して移住出来る。俺たち一人ひとりが、仲間のつながりをもって頑張れば、なんとか生き抜ける条件だけは行政が支援してくれることになった。だから、俺たちは自主退去という決断を下した。

俺たちは西口地下のダンボールハウスという村の中でも、仲間の力を合わせながら辛

うじて生き抜くことが出来た。だから、俺たちはどこへ行っても仲間の力を合わせていけば、生き抜くことが出来ると思う。仲間とながる事の大事さを俺たちはこの4年間培ってきたんだ。仲間の命は仲間を守る！これからもそうやって頑張って行こう。なぎさに入らない仲間も残った仲間と力をあわせて新宿現地のたたかいを継続させて行こう！どこへ行っても、どこにいても、俺たちにはかけがえない財産がある。それは、仲間が生きてきた4号街路、そして西口地下広場でのこの4年間だ。別れは辛い、けどそれは新たな出会いの始まりだ。

仲間たち！明日、最後のなぎさ寮への入寮は朝9時、安田下ダンボール村前に、そして正午に新宿連絡会はインフォメ前から撤収する。

泣きながら進もう仲間たち！俺たちの未来をこの手につかむまで！

●15日（日）
炊き出し配食
午後7時
中央公園にて
救世軍がやっている場所

新宿連絡会 新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める
連絡会議 98年2月13日 第11期NO134
東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け ☎03(3876)7073
現地・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村030(818)3450

準備作業出発
AM11:30
スバルビル新宿の目黒
集合に出発。

声 明

我々新宿連絡会は1998年2月14日正午をもって新宿駅西口地下広場から自主退去する。

残されたダンボールハウスは自主退去に応じた各人がその所有権を放棄したものとみなし連絡会事務局員一名の立ち会いのもと、代表してその占有権を解き、道路管理者に明け渡す。

今回の自主退去決定は、7日早朝、5名もの死傷者を発生させた西口地下広場インフォメーションセンター周辺での火災事故を受け、即座に東京都、新宿区などとの協議を行なった結果、直接の被災者救援、また今後の安全性が保障されない西口地下広場に起居する野宿者救援のため、我々が納得し得る緊急施策が実現されることが確約されたことへの、我々の主体的判断での決定である。

冬期臨時宿泊施設なぎさ寮への緊急入寮から4月以降の自立支援センターへとつなげていく支援は、かつての短期宿泊のみの援護ではなく、自立までの間長期にわたり援護を行なうもので、今後の課題は多いものの現行の「路上生活者対策」の枠内では考えられる最良のものであり、今回の火災事故における緊急施策を、このような我々が最低限納得し得る人道的な施策にして頂いた東京都また新宿区およびその他の関係者に我々は新宿駅西口地下広場の野宿者を代表し、まず感謝の意をのべる。

我々は我々の仲間の自助を軸としたつながりを大事にし、この支援を積極的に受け、事業内容の改善、とりわけ就労支援への行政努力を更にうながしながら、一人でも多くの仲間が自立されんことを切に願う。これが、今回不幸にも亡くなった3名への我々のせめてもの償いでもある。

我々新宿連絡会は、今回の事態を受け、多くの仲間が移行するであろう自立支援センター事業への積極的なかわりを開始していくと同時に、未だ野宿を強いられている新宿区内の野宿者への生活・就労保障を求めるたたかい、炊き出し、福祉申請、各種相談活動などの日常的な取り組みを従前通り行なう。拠点闘争としてではなく、機動力を生かしながらの取り組みとなるだろうが、我々が培ってきた新宿野宿労働者の能動性と団結は決して拠点を失うことぐらいでは消え失せない。新宿の地に野宿の仲間がいる限り、新宿連絡会はその存在理由を失うことはない。路上の仲間と共に、そして路上から脱した仲間と共に、底辺下層労働者の諸権利を勝ち取るたたかいを継続することを新たな出発の日、ここに宣言する。

1998年2月14日

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議 (新宿連絡会)

か、そして、世間の更なる冷たい視線のなか、排除され放り出されるのが償いなのか、俺たちは悩み、苦しんだ。そして、一人でも多くの仲間がより良く生きることが、亡くなった仲間へのせめてもの償いであるという結論を下した。すなわち西口地下広場から自主的に退去することである。

この最後のカードとも言うべき決断をもって俺たちは行政との必死な折衝を行ない、強制排除ではない、人道的な対策を求めた。そして、4月以降区内に自立支援センターが設置されるまで、なぎさ寮に無期限で入寮できることをなんとか確約させ、14日正午西口地下広場からの自主退去を宣言した。

14日の整然とした撤収は、俺たちの苦渋の決断を仲間がほんとうに理解してくれた結論だろうと俺たちは思いたい。最後まで残ると言っていた仲間も俺たちの説得に最後にはうなずいてくれた。

「俺たちは決して負けた訳じゃない」ある仲間はそのように言っただけで寂しい。そう、それは慰めや負け惜しみでなく、本当に俺たちは決して負けた訳じゃない。建設局や新宿

署に撤去された訳じゃない。俺たちが俺たちの行く末を俺たち自身、一人ひとりが考え、行政に訴え、自分の意思で地下広場からの退去を決めたんだ。連絡会の決断は、一人ひとりの苦渋の決断でもあった。俺たちはその決断を尊重する。誰から何と言われようと、そして時間が事態を風化させようとも、14日の仲間の決断を俺たちは守り続ける。ここに生きてきたものにしか分からない俺たちのこの思いは、ここに生きてきたものが亡くなった仲間の分まで生きることによって、必ず地中の芽になることだろう。

仲間たち！俺たちは新たなたかいをこれから強いられる。いままでのよう西口地下にあれば連絡会がいるからどうにかなるなんてことはもうない。が、連絡会は新宿に残った仲間を決して見捨てはしない。新たな仲間との出会いとたかいを希求するため、俺たちは定まった拠点を作らず、どこにでも出没する新宿全域の仲間のための連絡会に生れ変わる。西口、東口、南口の仲間、中央公園や戸山公園の仲間、各所に分散した仲間の本当の連絡役になるような運動体として俺たちはこ

れからもたかいかい続ける。そして、新宿の野宿の仲間、全都の野宿の仲間の生活・就労保障を行政に認めさせるたかいかいを仲間の力をあわせながら全力でたかいかい続ける。多くの先輩が自立支援事業やなぎさ寮で頑張る、対策の拡充のため寮内でのたかいかいを継続させている。寮内の仲間と更に結合しながら、俺たちの未来を俺たちは俺たち自身の力で勝ち取って行こう。

この一週間の苦悩と決断を、そして、なによりも仲間の死を無駄にしないためにも、残された仲間は、この苦境を突破しなければならぬ。

共に連絡会の赤旗のもと結集し、生きて奴等にやり返せ！

一九九八年二月十五日

新宿連絡会・事務局

ここに仲間が いる限り...

仲間たち！

この1週間の西口地下広場をめぐる混乱で多くの仲間に関心と迷惑をかけたことをまずお詫びする。

7日のインフォメ周辺での50件ものハウスを焼く大火災で3名の仲間が亡くなり、2名の仲間が重体で病院に運ばれた（中村君は一時意識は回復したものの再び危篤状態となっている）。そして、インフォメ周辺は俺たちが炊き出しや集会拠点として使っていた広場も含め復旧工事のため全面封鎖され、「左目」の倉庫や辛うじて残ったハウスも使用不可能となる事態となった。

7日夜段階で使用できる西口地下のハウスは安田生命下とスバルビル「新宿の目」前のハウス群あわせて約60件のみと、西口地下広場のダンボール村は壊滅的な打撃を受けることとなり、再びの強制撤去の予感や火災の恐怖や混乱だけが支配する重苦しい空間に西口

地下広場は変わってしまった。

我々は事態の打開に火災直後から即座に動き、着の身着のまま焼け出された仲間への救援を第一級の課題とし、救援物資を提供すると同時に、行政に緊急避難的な行政援助を求めると同時に、折衝を幾度となく重ね、当日から4日間、東京都のみならず、新宿区も大衆行動の力で動かしきり、なぎさ寮への緊急入寮を勝ち取った。直接被災を受けた仲間は百人近くこの緊急入寮でなぎさ寮に入寮することが出来た。そして、そのみならず、残った約60件のダンボールハウス、百名近くハウスで住み続けていた仲間の今後の問題をどうするのかを真剣に考えた。

確かに居続けることは難しい。あれだけの火災を起こしてしまった冷酷な事実、原因はどうあれ、俺たちの生活に早かれ遅かれ確実に悪い方の影響が降りかかって来る。居残ることが亡くなった仲間への償いなの

今週のスケジュール

●16日(月)

福祉行動
朝8時半スバルビル
「新宿の目」集合
朝9時区役所前集合
なぎさ寮激励行動
昼12時区役所前
集合・出発

●18日(水)

なぎさ寮激励行動
昼12時区役所前
集合・出発

パトロール

馬場は夕6時
新宿は夜9時
「新宿の目」集合

●19日(木)

福祉交渉
朝10時区役所前
集会後、交渉

●20日(金)

さくら寮面会
午後2時半
さくら寮前

●21日(土)

**新光館・春陽寮
面会**
午前11時
「新宿の目」集合

●22日(日)

準備行動
朝11時半「新宿の目」

炊き出し前集会
午後6時半

炊き出し配食
午後7時

中央公園にて
救世軍がやっている
場所

新宿連絡会

連絡先

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け

現地電話 030(818)3450

新宿野宿労働者の
生活・就労保障を求める
連絡会議

98年2月15日
第III期 NO1

小さな祭壇に「夫婦」の名

ホームレスの人たち三人が焼死した東京・JR新宿駅西口の火事から一夜明けた八日。フェンスに囲まれた現場の一角に、廃物の小さな机でつくった祭壇が置かれた。正面の白い紙には、男と女の名前が書いてある。姓は同じ。だれかが書き込んだ。

新宿地下で焼死 ホームレス男女

仲間の人たちの話を総合すると、二人が新宿に住みついていたのは約二年前だ。男性の方は六十歳くらい。建設作業をしていたが、体をこわし、路上生活を始めた。駅を回っては古雑誌を拾い集め、一冊四十一、六十円で仲間に買ってもらって

いた。酒が好きで、酔ってけんかもした。最近、ぶつり飲まなくなつたという。少し知的障害があつた四十歳すぎの

「うちちゃん」の面倒をみるようになってからだ。小柄だが「女小錦」とも呼ばれたうちちゃんと一緒に住み、料理もつくつた。去年夏、仲間「結婚するんや」といって、婚姻届の紙を得意そうに見せた。

で暮い、終電まで新宿駅の改札口に立ち、帰りを待つこともあつた。月に一度、ホームレスの女性らが集まる会があつた。「うちの家族は仲が悪くて息苦しかった」と語つたという。

にあつた。数十個が肩を寄せあつた。目撃者によると、当初火の手はその「家」より五メートル離れた。だが、二人が眠っていたところが炎に包まれるのは数分もかからなかつたという。

男は好きな酒ぶつりやめた 昨夏、得意げに「結婚するんや」

「家は、都のインフォに、冬季臨時泊施設に入るよう再三呼びかけていた。男性は「自由がいい」と口にし、ある仲間に「夫婦で住める寮はないし」と言つたという。

簡易祭壇の前で、線香をあげる人たち＝8日午後6時半、東京・新宿西口地下広場で



一九九八年二月九日 朝日新聞

編集・発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）

連絡先：☎ 一一一 東京都台東区日本堤一―二五―一一 山谷労働者福祉会館気付

☎ 〇三（三八七六）七〇七三 FAX 〇三（三八七六）一八六九

現地：☎ 〇三〇（八一八）三四五〇

カンパ送り先：郵便振替口座〇〇一七〇一一七三三六八二「新宿連絡会」

*新宿現地住所が自主退去に伴いなくなりました。カンパ物資および手紙など郵送物は山谷労働者福祉会館気付けで今後お願いいたします。

*「ダンボール村通信」9号は4月中旬発行予定です。勝手ながら今後「通信」は偶数月発行に変更させて頂きます。